

てはにはた、きとぞ見えはべれど、順がわきまへざらんことを、今の世に定めがたし。  
〔八雲御抄三下〕鶴鵠 いなおほせ鳥と云異説す。やめを稻負鳥と云非説なり。大和物語云、さよ  
ふけていなおほせ鳥のなくと云、庭た、きの條如何、庭た、きはよるなどいとなかぬか、吉  
今いなおほせとりのなくなべにけさふくかせにかりはきにけりといふ、是もいづれのとりと  
こ、ろえがたし。(略) 下

〔古今和歌集餘材抄四秋〕堀河院初度百首に、公實卿、板倉の橋をばたれもわたれども稻負鳥ぞ過が  
てにする、これは馬なりと心得てよまれたるとみえたり、これはもし古詩に、胡馬依北風といへ  
るにより、此歌のけさ吹風にとよめるを、鷹は北よりくるなれば、北風と心得て、馬には稻をおほ  
せる物なれば、よまれたるにや、下の忠岑が歌に、秋のかりほにおく露はいなをほせ鳥の涙とよ  
み、山鳥有稻負鳥名とて、鳥部に順は載られるものを萬葉には稻負鳥はよまれざるを引文に  
出されたるは順の誤也。(略) 中兼盛集に、九月田かる所におきなあり、からくしていそぎかりつる  
山田かな稻負鳥のうしろめたさに、足引の山田のこすげあすまでといなおほせ鳥をおもふも  
手ゆたし。(略) 中或抄云、定家卿近年好士安藝國にまかれりけるに、宿處より立出けるに、庭た、き  
のをりゐて鳴けるを、女の有けるが見て、いなおほせ鳥よといひけるをきゝて、など此鳥をいな  
おほせ鳥とはいひけるぞと問ければ、此鳥來り鳴時田より稻をおひて、家々にはこびおけば申  
なりといひけり、國々田舎の人は、かやうの事をやすらかにいひ出す、おかしく聞ゆ、偏におして  
いはむよりは、國々の土民の説用ゆべくや、但人の心にしたがふべし、源仲正歌に、しづの女がい  
なばこなぐるからさをに打はへてくる庭た、き哉、鶴鵠を庭た、きといへば右の説と此歌と  
かなひたれど、兼盛集の歌は稻をはむ馬ときこゆるに、鶴鵠はさもなければこと鳥にや、又或抄  
秀能は水鶴といへりと有、これは俊子の歌に、君がた、くともいへるにおもひよれる歟夏と秋